

# 愛と救し土台の交流を今に



して初めて、李徳全一行の功績に感謝を述べることへとつながった。7月に都内で開催された出版記念会で、著者の林氏は、「日中共同の執筆だった。日本の悪口でも共産党礼賛でもない。日中双方の国民が握手し、未来を迎える材料となるよう願う」と語った。

へ期待を述べた。羅氏と交友のあったクリスチャン・ビジネスマンの堀邊義一氏(株式会社知恵の書代表)らは14年に「日中共同市場」を立ち上げて異業種交流会を各地で開いていた。この動きを「李徳全研究会」として広げ、ビジネスを含む日中の草の根の交流を進めている。同研究会には、クリスト者らも関わっている。

戦後まだ国交のなかった頃に、日本で温かく迎えられる中国の政治家がいた。中国に残留した日本人約3万人と、BC級戦犯約千人の引き上げに尽力した李徳全だ。中華人民共和国で初の衛生大臣、中国赤十字の代表であり、クリスチャンの背景を持っていた。

同研究会は、多様な関係者のほか、内閣官房副長官(当時)の萩生田光一氏が日中映画交流の進展も紹介。他の挨拶でも李徳全の伝記のドキュメンタリー化や日中合作映画への期待などが語られた。

経済交流のみならず、友情、愛情を根拠にした道徳・倫理を持つリーダーを育てていきたい。戦後世代の次の世代として、争いの遺産ではなく平和の遺産を相続したい」と話した。「一切れのかわいたパンがあつて、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家にまざる」(箴言17章1節)を引用して、「日中は、どちらか一方がごちそうを食べる関係ではなく、一切れのパンを分け合える仲になつていきたい」と述べた。

従来本人について、まとった資料が少なく、日中両国で「忘れられていた」存在だったが、今年、日中国交正常化45周年記念出版として伝記『李徳全——日中国交正常化の「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性』(日本橋報社、程麻、林振江著、石川好隆監修)がまとめられた。この出版の背後には様々な草の根の交流があり、クリスト者らも積極的に関わっていた。【高橋良知】

同副総裁の五十嵐義隆氏は、「李徳全が夫婦で経験した無条件の救いがポイントになったのではなか」と注目する。李徳全の夫、馮將軍は自分の軍隊の中で障害を持つ親戚を面倒見ていた。ある日、李徳全夫妻のもとを訪れたアメリカ人の牧師夫妻がおり、突然部屋に入ってきたその障害を持つ身内に銃で牧師が殺されてしまった。牧師夫人は障害をもっていた犯人の面倒を見たいと申し出たのみならず、後に馮將軍が用意した賠償金を一円も受け取らなかったという話だ。この経験が、日本人を無償、無裁判で救うとしたことにつながったのではと語った。「自分に愛を示した人を知れば、偏見を乗り越えていけるのではないか。李徳全が示した愛を通して中国への理解を深めた。李徳全研究会では、

戦後、日本では在外の日本人引き上げが課題だった。日本赤十字代表が李徳全に、在留日本人の引き上げを要請。53年から順次日本人が帰国し、54年には、民間の赤十字の働きとして李徳全の訪問がなかった。72年の日中国交正常化を18年先行する交流となった。本伝記監修者で、作家の石川氏は、2014年に李徳全の存在を、孫の羅悠真氏より知り、悪化していた日中関係改善の一助としての論考を同年読売新聞に寄稿。岸田文雄外務大臣が日本政府と

1954年、李徳全一行が来日すると、各新聞は連日トップニュースで訪問の様子を伝えた。女性大臣であること、福祉教育に尽くした業績とともに、「親しみやすい風貌や、クリスト教を背景にもち聖母を思わせる穏やかな所作、そして弁舌さわやかな語り口は、日本人の『中共』に対するイメージを一新させ、日本中を感動の渦に巻き込んでいった」と著者の林氏は「まえがき」で言う。李徳全は1896年、貧しかったが三代続くクリスチャンの家庭に生ま

1954年、李徳全一行が来日すると、各新聞は連日トップニュースで訪問の様子を伝えた。女性大臣であること、福祉教育に尽くした業績とともに、「親しみやすい風貌や、クリスト教を背景にもち聖母を思わせる穏やかな所作、そして弁舌さわやかな語り口は、日本人の『中共』に対するイメージを一新させ、日本中を感動の渦に巻き込んでいった」と著者の林氏は「まえがき」で言う。李徳全は1896年、貧しかったが三代続くクリスチャンの家庭に生ま